

## 異文化理解からマルチ文化環境へ向けて

キーワード：文化間理解、多様化、ヨーロッパ、グローバル化

## 1・異文化接触

コミュニケーションを行う当事者が互いに異なる文化背景を持っている場合に、異文化接触が起こる。周知のように、異文化間という言葉は、同じ国に住んでいても、ある種のパラメーター（社会的、世代的、性別的、民族的、宗教的その他）が異なるサブカルチャーを持つ人々の間で行われるコミュニケーションも含まれるが（Hidasi 2008）、一般には、異文化接触・異文化間相互作用と言えば、国際的な意味で様々な文化に所属する人々の間のコミュニケーションを指している。

どの民族の文化にも、目に見える部分（食べ物、芸術、衣服、儀式、言語、建物など）と目に見えない部分（宗教観、自然観、価値観、時間の概念、空間の概念、礼儀など）があるが、目に見えない部分の方がはるかに多いと言われている。その割合は、専門家によって大きく異なるとはいえ、大体2対8とされている。したがって、ある民族の生活や行動を理解するためには、見えている文化よりも見えていない文化の方がずっと重要である。なぜならば、それは主に人間関係や社会行動に関わるものだからである。習慣、価値観、考え方、言語行動などは目には見えないが、われわれの毎日の生活や人間関係に大きく影響している。簡単な例として食事を挙げてみよう。日本で食卓に欠かせない箸を外国人が使いこなせるまでには時間がかかるが、出来ないことではない。しかも、その使い方は、日本国内だけでなく世界のどこでも覚えられし、世界のどこの日本レストランに行っても使えるスキルである。食事相手の日本人もそれを評価してくれるだろう。しかし、箸の使い方よりもはるかに重要なのが、食事のマナーや言葉使い、つまり一般的な人間行動である。食事への誘い方、食事に誘われた時の対応の仕方、食前・食後の礼である「いただきます」「ご馳走様でした」、わがままな注文はなるべく避けること、食事は最後までつきあうこと、割り勘か招待を受けるかの対処の仕方、再会時に前回の食事の礼を言うこと等、日本人との人間関係の維持発展に欠かせない知識・スキルである。こうした簡単な日常生活の場面にも間違いや失敗あるいは誤解の恐れが常に潜んでおり、小さな間違いが大きなトラブルや人間関係の問題に発展しかねない。このことから、目に見える文化を理解しているか否かよりも、目に見えない文化を知っているか否かの方がはるかに大切であることが分かる。箸の使い方などは、人間関係の適切な処理に比べればさして重要なことではない。ところが、不思議なことに、日本事情の教科書に始まり、実践日本事情オリエンテーションプログラムに至るまで、目に見える文化は詳しく紹介されているのに対し、目に見えない文化はほとんど触れられていない。

思ったことや感じたことの中から何を取り出してどのように言語化するかは、文化によって決まる。たとえば、日本文化においては、思ったことをそのまま言語化するのではなく、本音対建前の対立があり、それをコミュニケーションで表現することが規準になっている。そのため、聞き手は、話し手が何を言おうとしている

か理解することが求められる。

他の文化では、たとえば欧米文化の多くがそうであるが、「心をそのまま口にする」という倫理観に基づき、自分の考え、アイディアや感じたことなどをできるだけそのまま言語化することが期待されており、幼児期からからそうした行動を取るようにしつけられる。つまり、話し手が正確に言葉を使い、メッセージを伝えることが期待される。ここで日本文化と欧米文化のコミュニケーション・スタイルの差(indirect<>direct)が明白となる。そして、この差異がしばしば相互理解を難しくする原因となっている。日本語表現が伴う曖昧さは、多くの外国人にとって理解しにくい。一方、はっきりものを言う言語行動は、日本人にとっては、無礼、あるいは礼儀正しくない行動と捉えられる。

情報交換のルールも文化によって異なる。「作文は、何ページ書けばいいですか」という質問に対して、日本人教師が「まあ、3～4ページでいいでしょう」と答えた場合、ある国の学習者は、3ページで十分だと理解するが、他の国の学生は、4ページという言葉が発せられたからには、最低4ページは必要だと考え、念のためにと、はるかにオーバーする傾向がある。

「試験の準備はできましたか」という問いに対して、ほとんどのアジアの留学生が遠慮がちに「いえ、あまりできなかったんですが……」と言うのに対して、アメリカやオーストラリアの留学生は自信を持って「はい、完璧にできました」と答えるのが一般的だが、事実は逆である可能性が高い。こうした答え方にも、各文化が内包する社会における行動規範の差が明確に現れる。つまり、ある文化では遠慮や謙虚さが望ましい行動であるのに対して、他の文化では自信を表すことが高く評価されるため、こうした社会の行動規範が言語表現の差となって現れるのである。

異文化コミュニケーションとは、異なった文化を持つ者同士が接触あるいは交流すれば自然に相互理解が深まるという従来の楽観的な考え方を捨て、円滑なコミュニケーションの実現には現実には現実を踏まえた態度をとる必要があるという考え方である。

## 2・国際化の推進力とその影響

特に21世紀に入った現在、AとBの2つの文化接触という従来の異文化性に代わり、多文化性が特徴的になりつつある。現象としての多文化性は、既に数世紀前から認識されていたが、多文化社会の形成は、第二次世界大戦後から強まり、最近では支配的な傾向となってきた。

近年、人間を取り巻く世界、生活習慣、生活スタイル、モノ、行動規範等、あらゆる分野において、世界中と言ってもよいが、大きく二つの動きが現れている。一つは、文化の画一化・均一化への動きであり、もう一つは、まったく逆方向の、多様化への動きである。先進国では多かれ少なかれ同じような服装をし、若者は同じ音楽を聴き、同じような生活用品、スマートホン、音楽プレーヤー、電子機器等を使用している。その一方で、大都市ではこれまで見たこともないような各種エスニック料理やエスニック食品が楽しめ、職場や地域ではこれまでにない速さと規模で多文化性が進んでいる。前者の動きはグローバル化と関連付けられることが多く、後者の動きは多様化、ダイバーシフィケーションと結び付けられる。前者の動きの結果が画一化・均一化であり、後者の動きの結果が多様性である。

## 3・多文化主義への動き

ヨーロッパでは、多文化主義・多様性の維持と保存に対する要求がはっきりとした形で現れている。ヨーロッパのどの国でも、社会や人々の日常生活で民族あるいは少数民族の文化や言語が話題に上り、何らかの役割を果たしていると共に、片

やモビリティの増大、片や移民の影響を受け、ゆっくりではあるが着実に国際化が進行している。(Huntington – Harrison 2000)

多様性と国際化は、アイデンティティーの形成や維持という機能を担っているだけでなく、他にも品質の向上というポジティブな成果を伴っている。かつてない高品質に対する要求の形成、高い品質水準の設定への要求が、この国際化過程における一つのポジティブな産物となっている。より良い品質の達成には多様性は欠かせない。世界の名門サッカークラブでメンバーがみな同じ民族というチームはもう存在しない。どこのクラブでもレベルを確保するために最高の選手の獲得を目指している。世界的なオーケストラでも例外なくメンバーの民族構成は多様である。世界的水準は、世界という供給の場から最高の人間を選びすぎることでしか達成できない。お金に余裕のある大学も世界各地から最高の教授を「買い漁る」ことにより世界最高水準に到達できるのである。

しかしスポーツや芸術、学問の世界で新しいクオリティーを達成するためには、つまり、イノベーションの要求に応えるには、やはりここでも多様性の中から最高のものを選び出す必要がある。このようなより高い品質やイノベーションの要求を実現しようと思えば、モビリティを推進するほかはない。このモビリティは、通常、物理的な動きを仮定するが、コラボレーションの性格によってはバーチャル空間でのモビリティも含まれる。国際的な研究プロジェクトなどはその一例である。モビリティは、第一に当該の専門カテゴリーに関わるもので、学生、教師、芸術家、スポーツ選手、ビジネスパーソン、労働者などがこれらの過程に関わっている。モビリティは、出身地や自文化環境からの一時的な離反あるいは別れを意味するが、異文化環境での滞在が究極目標ではなく、最終的には帰還、帰国が想定されている。

もう一つの物理的な滞り場所の変更は、移民という名で記される方法である。この現象に関わる人々は、様々な理由、例えば、政治、イデオロギー、経済、自然災害等の理由で、故郷を後にし、他の国に定住しなければならなくなった難民達である。彼らの場合は、ある所からの脱出が主な目的、つまりプッシュ「押し出し」要因がこの行動の推進力となっている。難民の他に移住者、他国への移民の数も大きな数字となっている。彼らは、何かから逃げるのではなく、より良い生活、よりよいキャリアや将来、よりよい環境（研究者、学者、芸術家、スポーツ選手）、より有利な課税条件（例えば、ジェラール・ドパルジュ）、より良い教育を求めて別の国での生活を始めようとする人々である。彼らは、プルつまり「引き抜き」要因が移動の動機となっている。両タイプとも、合法的なカテゴリーと共に、公的な証書を持たずに公的機関を避けながらサバイバルしようとする非合法的なカテゴリーがある。

一人の教師が教室で同じ世代、同じ民族、概ね同じ文化的背景を持つ学習者を教える時代はもはや去った。今や、学校のクラスに、また大学の講義室に、文化的にも言語的にも背景の異なる様々な民族の学生がいる時代であり、場合によっては、世代も異なる学生達が机を並べて学んでいることも珍しくない。認知スタイルの多様性に関しては言うまでもない。モビリティの増大、移民の増加により、学習者の学歴やレディネス、学習経験などが多様化しており、異文化経験も様々である。外国に留学したり住んだりしたことのある学習者もいれば、そういう経験のまったくない学習者もいる。このような現象をマルチカルチュラルイズム、多文化性と呼ぶ。

#### 4. グローバル・ボーダレスな多文化共生社会

以上、難しい問題ばかり挙げてきたが、状況はかつてなく複雑・複合化している。いったい、このような複合過程は、上記のような困難さ以外に、何かメリットを内包しているのだろうか。この問いに対して、ヨーロッパからの応えは「イエス」である。欧州の文化政策の根本をなす信念によれば、多様性は、単に人間間のインターアクションに変化をもたらすからではなく、独創的なエネルギーを生み出すものとして肯定されている。これはシネルジーと呼ばれている。学習や成長、新たな品質の創造は、多様性の中から生じる模範や好例に学び、それを受容すること、さらには問題解決のための様々な角度からのアプローチを通じ、文化的な対話を通じて理想的な解決方法を探ることによって可能になるものである。2008年ヨーロッパでは「異文化対話年」であったことは、このような考え方を象徴するものである。

社会の未来は、文化間の対話に潜んでいることは間違いない。そう書くことは簡単だが、必要なことは人々にこれを教えることである。多様性とは何か、その対処法を説き、理解してもらわねばならない。その過程の中で、教育には極めて大きな役割と責任がある。多文化主義的な考え方を支える教育とは、異なる文化や文化グループとの協力を可能にする、その基盤を整えるような認知スキル、言語・非言語スキルを育成しようとするものである。多文化主義的な教育を通じ、偏見の形成や、複数の文化接触におけるグループや個人間の対立の大部分が回避できるようになるだろう。物理的な国境だけでなく、偏見という目に見えない国境も存在しない国、そういう開かれた世界に暮らしていきたいものである。

#### 【参考文献】

1. 神田外語大学留学生別科・日本研究所編『留学生のための日本案内55冊』神田外語大学附属図書館、2004.
2. 近藤裕『カルチュア・ショックの心理』創元社、1981.
3. 角田三枝『日本語クラスの異文化理解』くろしお出版、2001.
4. J. ヒダシ・日本語教育現場における異文化コミュニケーション。遠藤織江「日本語教育を学ぶ」三修社、2009 (2nd) 46-64.
5. 古田暁・石井敏・岡部朗一・平井一弘・久米昭元編『異文化コミュニケーション・キーワード』有斐閣双書2003.
6. Hidasi Judit: *Intercultural Communication: An Outline*. 三間社、東京、2008 (2nd)
7. Huntington, S. & Harrison, L.: *CultureMatters: How Values Shape Human Progress*. Basic Books, New York, 2000.